〔生化学　第80巻　第9号，p. 807，2008〕

アトモスフィア

基礎研究と応用研究

名　取　泰　博*

アトモスフィアは，高名な先生が大所高所からの意見を載せるところと思っていたが，何故か私に執筆依頼が来た．大所高所など私には到底及ぶべくもないが，折角のお誘いなので，標記のことについて思うところを書かせていただくことにした．

最近，基礎研究の評価として，その実用的価値を問うことが多くなってきている．研究者の説明責任ということで，一般の人々からの「その研究は何の役に立つのか？」という質問に対して，無理にでも研究の有用性を答えねばならないし，また基礎研究に対する研究費であるはずの文科省科研費でさえ，報告書に特許に関する記載を求められるようになった．生化学は生命現象を扱う基礎科学であるから，本誌の読者にもこのような風潮に困惑している人がいるであろう．また実用性の重視はすなわち基礎科学（純粋科学）の軽視となるから，このまま進めば将来，わが国の科学全体のレベルが低下するのではないかとも危惧されている．

一方，わが国の研究者社会では一般に，基礎研究に比べて応用研究は低く見られているように思う．工学部系や人文社会科学の分野のことはよく知らないが，医療やバイオの領域の研究者達を見渡してそう感じる．例として，医療に関する応用研究を挙げてみよう．たとえば，サイエンティフィックな意味での新規性には乏しいが，臨床現場での有用性が高い，新しい迅速診断法が開発した研究があったとする．そのような研究は，厚生労働省関連の研究費をもらうのに有利になりそうであり，対象が世間の興味を引く疾患ならば，マスコミに取り上げられる可能性も大きい．もしかすると，その研究者の所属機関は一般向けの宣伝に利用するかも知れない．しかし，おそらくその論文がインパクトファクターの高い雑誌に載ることはなく，従って研究者社会，特に基礎の研究者の本音としては大した評価を与えないような気がする．

これら二つのこと，すなわち基礎研究の実用性評価と，応用研究に新規性や独創性を求める評価は，私には同じコインの表と裏に思える．

本来，基礎研究と応用研究はその目的が全く異なる．前者はヒトが，自身やその周囲の世界の理解を高めることが目的であるのに対し，後者はヒトが現実に抱えている問題を解決することが目的である．実際には両者をねらった研究も多数あり，また結果的に，応用に多大な貢献をした基礎研究や，基礎科学における新しい理論の構築の元となった応用研究なども多いだろう．しかしそれでも，研究の評価は原則として，それぞれ本来の目的に照らし合わせて行うべきものだろうと思う．にもかかわらず現実には，昨今の実用性重視の風潮は基礎研究の評価に応用研究の基準を持ち込もうとしているように見えるし，その裏返しとして，基礎研究者は，基礎研究と同じ基準で応用研究の品定めをしているように思えてならない．

では具体的にどうしたらよいか，私にはよくわからない．研究者と一般の人々（及びマスコミや政策決定者）との間の，研究に関する認識のギャップや，競争原理から要請される一元的な評価基準（同じ土俵に乗らなければ競争ができない）など，そう簡単には変えられない，さまざまな要素があるのだろうと思う．ただ少なくとも，基礎研究と応用研究をむやみに同じ基準で比較することは害が大きい，と研究者自身がもう少し自覚し，互いの研究に謙虚になることが必要なのではなかろうか．

*岩手医科大学薬学部教授